貞元期における韓愈と張籍の贈答詩について

丸井　憲

はじめに
一、汴州における出會い
二、韓愈「病中贈張十八」詩の構成
三、「汴州亂る」――貞元後期という時代
四、韓愈「此日足可惜一首贈張籍」詩の構成
五、張籍の寄贈詩（貞元期の作）との比較
おわりに

はじめに

韓愈と張籍の出會いを取り持ったのは孟郊であった。貞元十二年〔七九六〕春、晴れて進士科の試験に及第した孟郊は、秋には郷里・湖州へと歸省した。その途次、和州（安徽省烏江縣）に立ち寄って張籍と會っていたことが、張籍の五古「贈孟郊」詩に「車を停む楚城（和州）の下、我を顧みて程（旅程）を念はず（停車楚城下、顧我不念程）」[1]などと記されている。張籍（字は文昌）は大曆元年〔七六六〕頃におそらく吳郡（江蘇省蘇州市）で生まれ、幼くして和州に一旦寓居するが、その後はむしろ和州のほうを生活の據點としていたらしい。[2]そして孟郊が南方から戻って、張籍の存在を初めて韓愈に傳えたのは、翌貞元十三年〔七九七〕、汴州（河南省開封市）においてであった。[3]韓愈の長編五古「此日足可惜一首贈張籍」詩（貞元十五年〔七九九〕、徐州での作）[4]には、孟郊から才子・張籍のことを初めて聞かされたいきさつが、回想の形で記されている。

……
念昔未知子　念ふ昔　未だ子〔張籍〕を知らざりしころ
孟君自南方　孟君〔孟郊〕南方よりす
自矜有所得　自ら得る所有るを矜（ほこ）り

言子有文章　子に文章有りと言へり
……

博學宏辭科の試驗に度々臨むも、落第を繰り返していた韓愈は、貞元十二年七月から汴州刺史・董晉の招きに應じてその幕下に移り、觀察推官などの任に就いていた。[5] この汴州には、孟郊のほか、李翺もやってきて韓愈の知遇を得ており、同十四年〔七九八〕の春には韓愈・孟郊・李翺の三人で「遠遊聯句」を作っている。韓愈を中心とする文學結社の中核は、實はここ汴州において形成されつつあったのである。

筆者は近年、韓愈の早期の贈答詩を主たる材料として、その「同志を求める文學」の內實と、五言の古體詩の成熟との關連性を探ってきた。韓愈の五古の贈答詩は當初、孟郊のそれと同樣、贈答詩・交遊詩の先驅けをなす建安文學に範を取って制作されたと考えられるが、次第にその寓喩性（比興）を脫し、敍述性（賦體）により重きを置く形態へと移行していった。そうした構成上の特徵は、本稿で扱う韓愈と張籍の贈答詩においても確認できる。本稿では、韓愈の早期の五言贈答詩に見られる特徵を改めて確認しながら、これまで一連の小論で述べてきたことをまとめてみることにしたい。

一、汴州における出會い

韓愈と張籍は貞元十三年〔七九七〕十月、汴州において初めて出會った。和州から北遊して汴州に至った張籍は、韓愈の激賞を受け、そのまま汴州城の西部にあった館舍に留め置かれ、韓愈について古文を習った。そして翌十四年〔七九八〕秋には韓愈が汴州で主催した鄕試において「首薦」（首席）となり、翌十五年〔七九九〕春には長安で、中書舍人の高郢が知貢擧を務める進士科の試驗に及第する。[6] 張籍が當時、李翺とともに韓愈について古文を習い始めていたことは、韓愈が同期の馮宿に宛てた書簡「與馮宿論文書」（貞元十四年、汴州での作）に「近ごろ李翺、僕に從って文を學び、頗る得る所有り。然るに其の人、家貧しく事多くして、未だ其の業を卒ふる能はず。張籍なる者有り、年は翺より長じ、而して亦た僕に學ぶに、其の文、翺と相ひ上下す。一・二年之を業とせば、至れるに庶幾からん（近李翺從僕學文、頗有所得。然其人家貧多事、未能卒其業。有張籍者、年長於翺、而亦學於僕、其文與翺相上下。一二年業之、庶幾乎至也）」と記されている。

韓愈と張籍が初めて出會ったときの模樣は、韓愈の書簡「答張籍書」（貞元十四年、汴州での作）の冒頭に綴られている。[7]

愈、始めて吾子を人人の中に望み見るに、固より異なる

有り。其の音聲を聆き、其の辭氣に接するに及んで、則ち交はりを願ふの志を有せり。因緣幸ひに會し、遂に圖る所を得しは、豈に惟に吾子の遺てざるのみならんや、抑も僕の遇ふ所に時有りしなるのみ（愈始者望見吾子於人人之中、固有異焉。及聆其音聲、接其辭氣、則有願交之志。因緣幸會、遂得所圖、豈惟吾子之不遺、抑僕之所遇有時焉耳）。……

【大意】私が始めて君の姿を人混みの中に望み見たとき、君は確かに異彩を放っておりました。そして君の聲を聽き、君の言葉に接するに及んで、私は君とお付き合いをしたいと、心から願うようになったのです。緣は幸いにも結ばれ、私の願いは叶いましたが、それは單に君が私を捨て置かなかったためばかりではなく、私が時宜を得て君と出會ったからなのでしょう。……

張籍自身の回想によれば、「北游して偶々公（韓愈）に逢ひ、盛語して相ひ稱明（稱揚）す（北游偶逢公、盛語相稱明）」（張籍「祭退之」、五古、寶曆元年〔八二五〕作）とあり、偶然の出會いのように語られているが、韓愈のほうは張籍の風姿を、言葉を交わす前から認めていたようである。あるいは孟郊が他日、韓愈の傍らに立ち、遠目に「あそこの人混みの中にいる彼が張籍ですよ」と指さして教えたことがあったのかもしれない。

汴州にて「盛んに語り」合う仲になった韓愈と張籍は、「古人之道」「聖人之道」について次第に熱い議論を闘わすようになってゆく。また古文の綴り方を習うという觀點から、二人はしばしば往復書簡の形をとって議論を交わした。前掲の「答張籍書」もその一通に數えられる。これらの書簡には、氣心の知れた二人の、齒に衣着せない討論のありさまが實に生き生きと綴られている。

議論の發端は張籍の「與韓愈書」（貞元十四年〔七九八〕、汴州での作）である。この中で張籍は、「聖人之道」が釋・老二氏に押されて振るわない現狀を憂えながら、韓愈に對し、①『孟子』や『法言』のような書物を著すことを勸めるとともに、②駁雜・無實の談や强辯を愼み、③博塞（博奕）などに空しく時を費やすことを戒めている。以下、往復書簡の討論の模樣を抄錄してみよう。まず張籍の發議から。

執事（韓愈への尊稱）聰明にして、文章は孟軻・揚雄と相ひ若けば、蓋し一書を爲して以て聖人の道を興存し、時の人・後の人をして其の異學（釋・老）の爲す所を去絕（拒絕）するを知らしめんか。曷ぞ俗に俯仰し、囂囂として多言の徒たる可けんや（執事聰明、文章與孟軻揚雄相若、蓋爲一書以興存聖人之道、使時之人後之人知其去絕異學之所爲乎。曷可俯仰於俗、囂囂爲多言之徒哉）。

比（このごろ）執事の多く駁雜・無實の說を尙（たつと）び、人をして之を前に陳べしめて以て歡を爲すを見れば、此れ以て令德を累（わずら）はす（美德を損なう）有らん。又た商論（討論）の際、或いは人の短（そし）るを容れざること、私に任せて勝ちを尙ぶ者の如きは、亦た累はす所有るなり（比見執事多尙駁雜無實之說、使人陳之於前以爲歡、此有以累於令德。又商論之際、或不容人之短如任私尙勝者、亦有所累也）。

願はくは執事、博塞の好みを絕ち、無實の談を棄て、弘く廣く以て天下の士に接し、孟軻・揚雄の作を嗣ぎ、楊・墨・老・釋の說を辨じ、聖人の道をして復た唐に見（あらは）しめなば、豈に尙（よ）からずや（願執事絕博塞之好、棄無實之談、弘廣以接天下之士、嗣孟軻揚雄之作、辨楊墨老釋之說、使聖人之道復見於唐、豈不尙哉）。

——以上、張籍「與韓愈書」より拔粹

この書簡に對して、韓愈は前揭の「答張籍書」をしたため、①書物を著すには、四十前の自分はまだ未熟であり、五六十を待って著しても遲くはない、②駁雜・無實の談をなすのは戲れに過ぎず、酒色に溺れるよりはましだろう、などと反論しながら、③勝ち氣で博奕を好む性癖については、素直に反省の意を表している。

夫れ所謂る書を著すは、義は辭（文字）に止まるのみ。之を口に宣ぶると、之を簡に書すると、何れをか擇ばん。孟軻の書は、軻自ら著せしに非ず、軻既に歿し、其の徒萬章・公孫丑の相ひ與（ともに）軻の言ふ所を記せしのみ（夫所謂著書者、義止於辭耳。宣之於口、書之於簡、何擇焉。孟軻之書、非軻自著、軻既歿、其徒萬章公孫丑相與記軻所言焉耳）。

然るに一說有り、「當世を化するには口に若くは莫く、來世に傳ふるには書に若くは莫し」と。又た吾が力の未だ至らざるを懼るるなり。「三十にして立ち、四十にして惑はず」。吾の聖人に於けるや、既に之に過ぎたるも（私も三十は超えたが）、猶ほ及ばざるを（まだ四十にはなっていないのを）懼る。……請ふ、五六十を待ちて然る後に之を爲し（書物を著し）、其の過ち少なきことを冀（こひねが）はん（然有一說、「化當世莫若口、傳來世莫若書」。又懼吾力之未至也。「三十而立、四十而不惑」。吾於聖人、既過之猶懼不及。……請待五六十然後爲之、冀其少過也）。

吾子、又た吾の人人と無實・駁雜の說を爲すを譏（そし）るも、此れ吾が戲れを爲す所以のみ。之を酒色に比ぶれば、閒（かん）有らずや（まだましではないか）。吾子、之を譏るは、同（とも）に浴して裸裎（らてい）を譏るに似たり（五十步百步を笑うのたぐいだ）。

「商論して氣を下す（勝ち氣を抑える）こと能はず」の若きは、或いは此れ有るに似たり（そのとおりかもしれない）。當に更に思ひて之を悔ゆべきのみ。博塞の譏りは、敢へて敎へを承けざらんや（ご指摘を眞摯に受け止めたい）。其の他は相ひ見ふを俟たん（吾子又譏吾與人人爲無實駁雜之說、此吾所以爲戲耳。比之酒色、不有閒乎。吾子譏之、似同浴而譏裸裎也。若「商論不能下氣」、或似有之。當更思而悔之耳。博塞之譏、敢不承敎。其他俟相見）。

――以上、韓愈「答張籍書」より抜粹

このあと議論はさらに續き、その模様は張籍の「重與韓退之書」および韓愈の「重答張籍書」に詳しいが、論點はすでに上掲の往復書簡に盡くされている。これらの議論から窺われるのは、兩者の雅俗にわたる忌憚のない主張の應酬であり、その言論のすがすがしさ、風通しの良さである。ここには、小論「韓愈の青年期における交遊とその贈答詩の特徴―李觀に贈った詩二首を中心に―」（『中唐文學會報』第二十一號所收）で觸れた、貞元前期の士人らによる上書の氣風と相い通ずるものが感じられる。

二、韓愈「病中贈張十八」詩の構成

さて、この頃に書かれたと思われる韓愈の贈答詩に「病中贈張十八」詩（五古）がある。同詩は淸の方世擧（一六七五～一七五九）の『韓昌黎詩集編年箋注』では長慶四年〔八二四〕、最晩年の作とされていたが、[8]錢仲聯氏は詩中の「籍也處閭里、抱能未施邦」などの記述を根據に、張籍がまだ進士科に及第していない頃のものと見なして、これを「貞元十四年〔七五八〕孟冬の作とすべき」としている（『韓昌黎詩繫年集釋』卷一）。四十四句に及ぶ長篇の古體詩であり、もはや比興的な詠い出しは消え、代わりに處々に史書の記載に基づく故事を用いている。そうすることで韓愈は、單調となりがちな敍述の進行に斬新な比喩を織り交ぜ、かつ諧謔味を添えようと試みている。以下、段を區切って讀んでみよう。

01中虛得暴下　　中虛　暴下を得
02避冷臥北窗　　冷を避けて北窗に臥す
03不蹋曉鼓朝　　曉鼓を蹋（ふ）みて朝（てう）せず
04安眠聽逢逢（ほうほう）』　安眠して逢逢たるを聽く』（以上、敍事）

【大意】下痢をした私は、冷えないように北窓のあたりに臥せりながら、州府の廳舍に參上せず、曉の太鼓がドンドンと鳴るのを聽いていた。

05籍也處閭里　　籍や閭里に處り
06抱能未施邦　　能を抱くも未だ邦（くに）に施さず

07文章自娛戲　文章自ら娛戲し
08金石日擊撞　金石日に擊撞す
09龍文百斛鼎　龍文百斛の鼎
10筆力可獨扛　筆力獨り扛ぐべし
11談舌久不掉　いはく「談舌久しく掉はず
12非君亮誰雙』　君に非ずんば亮に誰か雙たらん」と』

（以上、敍事）

【大意】張籍君は陋巷にあって、いまだその能力を國政に活かすには至っていないが、文學を自らの樂しみとし、日々その金石のような響きを打ち鳴らしている。龍の文様のある百斛の鼎を持ち上げるほどの筆力を有する張君は、（私のところにやってきて）「久しく辯舌を振るう機會がなかった。韓さんでなければ誰が私の相手になれよう」というのだった。

【出典】○百斛鼎　『史記』趙世家。○扛鼎　『史記』項羽本紀。○掉舌　『史記』淮陰侯列傳（酈食其の故事）。

13扶几導之言　几に扶りて之を導きて言はしむれば
14曲節初摐摐　曲節初めは摐摐たり
15半塗喜開鑿　半塗にして開鑿を喜び
16派別失大江　派別して大江を失ふ
17吾欲盈其氣　吾　其の氣を盈たさんと欲し
18不令見麾幢　麾幢を見せしめず
19牛羊滿田野　牛羊を田野に滿たしめ
20解旆束空杠』　旆を解きて空杠を束ぬ』（以上、敍事）

【大意】私は肘掛けにもたれながら、發言を促すと、君の熱辯はジャンジャンと調子よく始まった。しかし途中で議論は横道に逸れ始め、分岐したまま本筋を外れてしまった。私は氣力を溜めこもうと思い、あえて自分の旗幟を明らかにせず、かわりに牛や羊を田野に放って（伏兵を置き）、旗を下ろして竿を束ねる戰法に出た。

【出典】○盈氣　『左傳』莊公十年。○牛羊滿田野　『史記』卷一百十「匈奴列傳」の「今帝（武帝）卽位」の條に「漢、兵三十餘萬を馬邑の旁に伏し、御史大夫韓安國を護軍と爲し、四將軍を護りて以て單于に伏す。單于既に漢塞に入り、未だ馬邑に至らざること百餘里、畜の野に布くも人の牧する者無きを見て、之を怪しみ、乃ち亭を攻む（漢伏兵三十餘萬馬邑旁、御史大夫韓安國爲護軍、護四將軍以伏單于。單于既入漢塞、未至馬邑百餘里、見畜布野而無人牧者、怪之、乃攻亭）」とあるのに據るか。

21傾罇與斟酌　罇を傾けて與に斟酌し
22四壁堆甓缸　四壁に甓缸堆し
23玄帷隔雪風　玄帷　雪風を隔て
24照鑪釘明釭　鑪を照らすに明釭を釘うつ

25夜闌縱捭闔　夜闌にして捭闔を縱にし
26哆口疎眉厖　口を哆きて疎眉は厖たり
27勢侔高陽翁　勢いは侔し　高陽の翁の
28坐約齊横降』　坐ながらにして齊横に約して降すに』

（以上、敍事）

【大意】酒瓶を傾けて酒を酌み交わすうちに、四方の壁には酒がめが積み上がった。黒い帷が風雪を遮るなか、壁に掛けた明かりが酒杯を載せた盆を照らす。夜も更けて、君は大口を開けながら熱辯を振るうが、りりしい眉にはすでに白髪が混じっている。その威勢はまるで酈食其が、何もせずに（辯舌だけで）田横を説得し降伏させたようなもの。

【出典】○疎眉　『漢書』霍光傳。○高陽翁　酈食其を指す。○齊横　戰國齊の田横。『史記』田儋傳に基づく。

29連日挾所有　連日　有る所を挾み
30形軀頓脛肛　形軀　頓に脛肛たり
31將歸乃徐謂　（子）將に歸らんとして（吾）乃ち徐ろに謂ふ
32子言得無哤　「子が言　哤るる無きを得んや」と
33迴車與角逐　車を迴らせて與に角逐し
34斫樹收窮龐　樹を斫りて窮龐を收む
35雌聲吐款要　雌聲して款要を吐き

36酒壺綴羊腔』　酒壺　羊腔を綴る』（以上、敍事）

【大意】日々有らん限りの書物を脇に抱えて猛勉強する君の體は、にわかに大きく膨らんだよう。そして君が（意氣揚々と）歸ろうとしたとき、私はおもむろに聲をかけた、「君の論理は破綻していやしないかね」と。やおら私は戰車を廻らせて君と爭い、大樹を削って（文字を書き）、窮地の龐涓（張籍に比する）を術中に收めた。すると君は弱々しい聲で本音を吐き、酒壺と羊肉とを差し出して（降參して）きた。

【出典】○窮龐　『史記』孫子吳起列傳に描かれた魏の將軍龐涓を指す。○雌聲　『晉書』桓溫傳。○羊腔　羊肉の意。『左傳』宣公十二年の鄭伯の故事。

37君乃崑崙渠　いはく「君は乃ち崑崙の渠
38籍乃嶺頭瀧　籍は乃ち嶺頭の瀧
39譬如蟻垤微　譬へば蟻垤の微なるが如し
40詎可陵崆峒　詎ぞ崆峒たるを陵ぐべけんや
41幸願終贈之　幸願はくは終に之に贈り
42斬拔枏與椿　枏と椿とを斬拔せよ
43從此識歸處　此れより歸處を識り
44東流水淙淙』　東流して水淙淙たらん」と』

（以上、敍事）

【大意】（張君はこう言い出した）「韓さんはさながら崑崙に源

を發する黄河、私は所詮、五嶺を流れ出る早瀬にすぎません。蟻塚のようにちっぽけな私に、どうして險しい山々を凌ぐことなどできましょう。どうか私を敎え導き、ひこばえ（餘計な知識）を剪除して頂きたい。これからは歸すべき所を識り、水は東に向かって滔々と流れることでありましょう」。

長篇の古體詩の場合、四句ないしは八句で一つのユニットをなすことが多いので、筆者は右のように改段してみたが、興味深いことに各段落の後半四句に史書に基づく典故が集中している。これはおそらく、前半の敍述の單調さを補うために、後半を比喩で固めたものと思われ、結果としてそれが詩の展開に物語的な要素と諧謔味とを付與することになっている。[10] 長篇化と物語化は、中唐古體詩の特徴の一つといってよいだろうが、韓愈のこの作品にもその特徴が見て取られる。

三、「汴州亂る」——貞元後期という時代

貞元後期、唐王朝は再び多難な時代を迎えていた。

貞元十年〔七九四〕

＊韓愈、三たび博學宏辭科に落第。

德宗、官は大小となく自ら選んでこれを用いる。

五月　陸贄、德宗を諫め、また兩税法の弊害を上奏する。

十二月陸贄、裴延齡を批判し、太子賓客に左遷される。

貞元十一年〔七九五〕

四月　陸贄、忠州別駕に左遷される。

諫議大夫の陽城、陸贄左遷の非を論ずる。

七月　陽城、國子司業に改められる。

貞元十二年〔七九六〕

＊孟郊、進士科に及第。

七月　宣武節度使の李萬榮、沒し、汴州亂れる。

董晉、宣武節度使となる。

＊韓愈、汴宋亳潁等州觀察推官となる。

八月　董晉、宣武行軍司馬の陸長源とともに亂を鎭壓。

九月　裴延齡、沒する。

＊李翺、汴州に來る。

貞元十三年〔七九七〕

この頃、宦官を宮市使とする。

＊李翺、進士科に及第。

＊孟郊・張籍、汴州に來る。

貞元十四年〔七九八〕

七月　鄭餘慶、宰相となる。

九月　彰武節度使の吳少誠、淮西に跋扈する。

陽城、道州刺史に左遷される。

十一月　＊韓愈、汴州で鄉試の試驗官となる。

＊張籍、汴州の鄉試で首席となる。

貞元十五年〔七九九〕

二月　董晉、沒する。

＊韓愈、董晉の柩に從って汴州を離れる。

後任の陸長源ら、部下に殺され、汴州再び亂れる。

＊韓愈、徐州に疎開していた家族と再會。

＊張籍、進士科に及第し、徐州で韓愈と再會。

八月　德宗、吳少誠の官爵を削奪し、諸道に命じて討たせる。

＊韓愈、徐泗濠節度使の張建封の幕下に入る。

貞元十六年〔八〇〇〕

五月　＊韓愈、徐州を去り、家族とともに洛陽へ行く。

張建封、沒し、徐州亂れる。

將卒、張建封の子の張愔を立てて反する。

杜佑が討つも勝たず、張愔を徐州團練使とする。

九月　鄭餘慶、郴州司馬に左遷される。

討伐軍、吳少誠を破り得ず。

十月　德宗、吳少誠を赦し、官爵を復する。

貞元十七年〔八〇一〕

＊孟郊、詮試に及第し、溧陽縣尉となる。

五月　成德節度使の王武俊、沒する。

九月　韋皐、吐蕃を雅州で大破したと上奏。

貞元十八年〔八〇二〕

一月　吐蕃、維州・昆明に據って降らず。

＊韓愈、詮試に及第し、四門博士となる。

＊韓愈、監察御史となり、柳宗元・劉禹錫と同僚に。

貞元十九年〔八〇三〕

この年、一月から七月まで雨降らず。

三月　杜佑、宰相となる。李實、京兆尹を兼ねる。

十二月＊韓愈、京畿の窮狀を上疏するも、陽山縣令に左遷。

王叔文、韋執宜・呂溫・陸淳・柳宗元・劉禹錫らと死友の交わりを結ぶ。

貞元二十年〔八〇四〕

九月　太子の李誦、風疾を得て言語不能となる。

貞元二十一年〔八〇五〕

一月　德宗、崩ずる。太子の李誦、卽位して順宗となる。

王叔文・王伾ら、政權を掌握。

五月　王叔文、宦官の兵權を奪う。

八月　永貞と改元。順宗、退位し、太子の李純、卽位して憲宗となる。王叔文・王伾、左遷される。

＊韓愈、大赦の知らせを受け、陽山を出る。

＊韓愈、江陵の法曹參軍となる。

十一月柳宗元・劉禹錫ら八人、諸州の司馬に左遷される。〔参照：内田泉之助監修『中國の名詩鑑賞6中唐』（東京：明治書院、一九八〇）巻末の「中唐詩年表」（植木久行氏編）／川合康三・緑川英樹・好川聰編『韓愈詩譯注』第一冊（東京：研文出版、二〇一五）巻末の「韓愈年譜」〕

韓愈は貞元八年〔七九二〕の進士科及第後、博學宏辭科の試驗に三たび應ずるも落第するなど、不遇な日々を送っていた。そのころ、元宰相で東都留守だった董晉（七二三～七九九）が、貞元十二年〔七九六〕に汴州刺史・宣武軍節度使を拜するにあたり、韓愈を觀察推官として汴州に招いたのである。ただその任官はある種危險を伴うものであった。

韓愈自身の手になる「董公行狀」[11]によれば、汴州は當時、きな臭い事件がよく起こる土地柄であった。

汴州は大曆よりこのかた兵事多し。劉玄佐、其の師を益して十萬に至り、玄佐死して、子の〔劉〕士寧、之に代はるも、畋遊（狩獵）して度無し。其の將李萬榮、其の畋に乘ずるや、之（劉士寧）を逐ふ。萬榮、節度たること一年、其の將韓惟清・張彥材、亂を作し、萬榮を殺すことを求むるも剋くせず（汴州自大曆來多兵事。劉玄佐益其師至十萬、玄佐死、子士寧代之、畋遊無度。其將李萬榮乘其畋也、逐之。萬榮爲節度一年、其將韓惟清・張彥材作亂、求殺萬榮不剋）。

三年にして、〔李〕萬榮、風を病み、昏として事を知らず。其の子〔李〕迺、復た〔劉〕士寧の故（部下・李萬榮の息子という緣故）たらんと欲す。監軍使俱文珍、其の將鄧惟恭と與に之（李迺）を執へて京師に歸るに、萬榮死す。詔未だ至らざるに、〔鄧〕惟恭、軍事を權ぬ（三年、萬榮病風、昏不知事。其子迺、復欲爲士寧之故。監軍使俱文珍、與其將鄧惟恭執之歸京師、而萬榮死。詔未至、惟恭權軍事）。

劉氏はその將・李氏に叛かれ、李氏もまたその將・鄧氏に叛かれるなど、下剋上が繰り返されていた汴州。この地に董晉が德宗の命を受けて任に赴くにあたって、韓愈はその隨員を務めている。謀叛を企む鄧惟恭の虛を突くように、董晉は兵卒をあえて伴わず、少人數ですばやく汴州に乘り込み、鄧惟恭に翻意を促した。董晉が自分を害する意のないことを確信した鄧惟恭は喜び、また汴州の人々は口々に董晉を「仁人なり」と稱えた。董晉のこの武勇傳は、韓愈がしばしば言及するだけでなく、その後汴州にやってきた張籍も、その長篇五古「董公詩」の中で、

東方有艱難　東方〔汴州〕に艱難有り
公乃出臨戎　公〔董晉〕乃ち出でて戎に臨む
單車入危城　單車にて危城に入り

慈惠安群凶　慈惠もて群凶を安んず

と稱えている。

そもそも汴州にしばしば亂が起こった原因の一つは、歴代の節度使たちが士卒らを懐柔するために俸祿を厚くし、それが却って士卒らの驕慢を招いていたことであった。董晉は汴州に乗り込んだ翌日、この弊習をとり罷めた。貞元十二年七月のことである。

翌八月、德宗は汝州刺史の陸長源を汴州の行軍司馬に、孟叔度を支度營田判官に任じ、董晉をささえるよう命じた。その後數年のあいだ、汴州は落ち着きを取り戻し、貞元十四年〔七九八〕三月には、舟による竊盜・密輸などを防ぐため、汴州城内に新たに水門を作り、俱文珍や陸長源らも列席のうえ、盛大な落成式を擧行している。その模様は、「從事」を務めていた韓愈が書いた「汴州東西水門記」という文章に詳しい。

ところがその後、董晉はしばしば朝勤を申し出たが、德宗から許しが出ない。まもなく董晉は病に罹り、再度朝勤を願い出たうえ、

人心、動き易く、軍旅、虞れ多し。臣の生くるに及びては、計、先には定まらず。他日に至りては、事或いは期し難し（人心易動、軍旅多虞。及臣之生、計不先定。至于他日、事或難期）。

と德宗に訴えたが、やはり聞き入れられない。

翌貞元十五年〔七九九〕二月三日、董晉は汴州にて薨じた。享年七十六。韓愈はその柩に從って東都洛陽へと向かったが、四日後の二月七日、汴州では再び反亂が勃發。留守を預かっていた陸長源と孟叔度の二人は、部下たちの手にかかって殺された。

四、韓愈「此日足可惜一首贈張籍」詩の構成

洛陽へと向かう韓愈の耳に「汴州亂る」との知らせが入ったのは、亂が起こってから數日後、偃師に宿を取っていた夜のことであった。その後まもなく、汴州に殘していた家族が難を逃れて徐州に落ち着いていることを知って安堵し、洛陽に董晉の柩を送り届けると、ただちに盟津（もうしん）・新鄭・許州・陳州を經て、徐州にいる家族の元にたどり着いた。[12] 韓愈は徐泗濠節度使の張建封の元に身を寄せるが、その後、進士科に及第した張籍が徐州に至り、韓愈との再會を果たしている。韓愈はそのとき、本稿の冒頭でも引いた大長篇の五古「此日足可惜一首贈張籍」詩を作った。

この作品は、汴州での張籍との出會いに始まり、張籍が鄉試に首席で合格した場面までを振り返るとともに、汴州に亂が起

こってから韓愈自身が徐州に落ち着くまでの顛末を克明に記録し、最後は張籍と徐州で再會できた喜びと、再度の別れを惜しむ氣持ちとで結んでいる。杜甫の「北征」や「彭衙行」にも比せられるほどの一大敍事詩であり、その篇幅もまた「北征」の百四十句と奇しくも一致している。分段はやはり四句・八句を主體とするが、この詩の場合は六句を一つのユニットと見たほうがよい部分も多い。全篇賦體（敍事・抒情・說理）で構成されており、比興や典故の使用はほとんど見られない。また對句をほとんど使わないのに構成には弛みがなく、冗長さも感じさせない。韓愈の强靭な構想力と構成力とが遺憾なく發揮された傑作といえるであろう。

01此日足可惜　此の日　惜しむべきに足り
02此酒不足嘗　此の酒　嘗むるに足らず
03捨酒去相語　酒を捨て去りて相ひ語り
04共分一日光』　共に一日の光を分かたん』（以上、抒情）

【大意】今日はまことにかけがえのない日だ。こんな酒など飲むに足らない。酒はやめにして語ろうではないか。この一日の光陰を分かち合おう。

05念昔未知子　念ふ昔　未だ子を知らざりしころ
06孟君自南方　孟君　南方よりす
07自矜有所得　自ら得る所有るを矜（ほこ）り
08言子有文章』　子に文章有りと言へり』（以上、敍事）
09我名屬相府　我が名は相府に屬すれば
10欲往不得行　往かんと欲すれども行くことを得ず
11思之不可見　之を思へども見るべからず
12百端在中腸』　百端　中腸に在り』（以上、抒情）

【大意】思えばかつて、君をまだ知らなかったころ、孟郊君が南方から戻るや、いい人を見つけた、と誇らしげに言い、君には文才があると言ったのだ。汴州の董晉さまの幕府に勤めていた私は、南方に訪ねて行きたくとも適わなかった。君のことを思いつつも會うことができず、千々の思いが心にわだかまっていた。

13維時月魄死　維（こ）れ時に月魄死し
14冬日朝在房　冬日　朝に房（ぼう）に在り
15驅馳公事退　驅馳して公事より退くは
16聞子適及城　子の適（たまた）ま城に及ぶと聞けばなり
17命車載之至　車を命じて之を載せて至り
18引坐於中堂　引きて中堂に坐せしむ
19開懷聽其說　懷を開きて其の說を聽けば
20往往副所望』　往往望む所に副（そ）ふ』（以上、敍事）

【大意】その年の冬十月の朔日の朝、急いで役所を退出したの

は、君がたまたま汴州城に來ていると聞いたからだった。車で君を迎えにやらせ、我が家の座敷に請じ入れ、胸襟を開いて君の話を聞いたところ、期待に違わぬ見識ぶり。

21孔丘歿已遠　孔丘　歿して已に遠く
22仁義路久荒　仁義　路久しく荒る
23紛紛百家起　紛紛として百家起こり
24詭怪相披猖　詭怪　相ひ披猖す
25長老守所聞　長老　聞く所を守り
26後生習爲常　後生　習ひて常と爲す
27少知誠難得　少知　誠に得難く
28純粹古已亡』　純粹　古に已に亡ぶ』（以上、說理）

【大意】孔子が歿してすでに久しく、仁義の道も荒れ放題。諸子百家が現れ、奇怪な言說がはびこってしまった。長老たちはただ聞くままにそれらを墨守し、若者たちもそれらに親しむのを常としてきた。いくらか物の分かる者さえ實に得難く、純粹な教えは遠い過去にすでに亡んでいた。

29譬彼植園木　譬へば彼の園に植うる木の
30有根易爲長』　根有れば長きを爲し易きがごとし』（以上、說理）
31留之不遣去　之を留めて去らしめず
32館置城西旁　館して城西の旁に置く
33歲時未云幾　歲時　未だ云に幾ばくならざるに
34浩浩觀湖江』　浩浩として湖江を觀るがごとし』（以上、敍事）

【大意】一方、君はさながらあの庭に植わった木のように、根っこがあるのですくすくと育ちやすい。私は君を引き留め、汴州城の西の館舍に住まわせた。いくばくもなくして君は、廣大な江湖のように成長した。

35衆夫指之笑　衆夫　之を指して笑ひ
36謂我知不明　我を謂ひて知は明ならずとす
37兒童畏雷電　兒童の雷電を畏るるがごとく
38魚鼈驚夜光　魚鼈の夜光に驚くがごとし
39州家擧進士　州家〔刺史〕　進士を擧ぐるに
40選試繆所當　選試　當つる所を繆る
41馳辭對我策　辭を馳せて我が策に對ふれば
42章句何煒煌』　章句　何ぞ煒煌たる』（以上、敍事）

【大意】しかし多くの人は君を指さして笑い、私に人を見る目がないなどと言った。それはあたかも子どもが稻妻を怖がり、魚やカメが月光に驚くようなもの（君の潛在能力を實は內心恐れていたのだ）。汴州刺史の董晉さまが鄉試をおこなうにあたり、私ごときを試驗官に充てられた。君は私の出題に言葉を盡

くして答えたが、その文章のなんとすばらしかったことか。

43相公朝服立　相公〔董晉〕　朝服して立ち
44工席歌鹿鳴　工席　鹿鳴を歌ふ
45禮終樂亦闋　禮終はりて樂も亦た闋(を)はり
46相拜送於庭　相ひ拜して庭に送る
47之子去須臾　この子〔張籍〕　去ること須臾にして
48赫赫流盛名』　赫赫として盛名を流す』（以上、敍事）
49竊喜復竊歎　竊かに喜び復た竊かに歎ず
50諒知有所成』　諒(まこと)に成す所有るを知る』（以上、抒情）

【大意】董晉さまは禮裝して立たれ、樂人たちは「鹿鳴」の歌をうたった。式典が終わって音樂もやむと、廣場で皆が禮拜して君を見送った。君が去ってほどなく、その名は大いに知られることになった。私は心中密かに喜び、またため息をついた。君はついに思いを成就したのだ。

51人事安可恆　人事　安(いづく)んぞ恆なるべけんや
52奄忽令我傷　奄忽として我をして傷ましむ
53聞子高第日　子の高第せるを聞きし日
54正從相公喪　正に相公の喪(さう)に從ふ
55哀情逢吉語　哀情　吉語に逢ひ
56惝怳難爲雙』　惝怳(しやうくわう)として雙を爲し難し』（以上、抒情）

【大意】しかしながら、人の世はまことに常無きものであり、たちまち我が心を苛む出來事が起こった。君が進士科に及第したまさにその日に、私は董晉さまの柩に從って（洛陽に向かって）いた。悲しみが朗報と重なってしまい、相反する二つの思いをどう受け止めてよいかわからず、私はただただ茫然としていた。

57暮宿偃師西　暮に偃師の西に宿り
58徒展轉在牀　徒らに展轉して牀に在り
59夜聞汴州亂　夜聞く　汴州亂ると
60遶壁行彷徨　壁を遶りて行きて彷徨す
61我時留妻子　我　時に妻子を留め
62倉卒不及將　倉卒として將(ひき)いるに及ばず
63相見不復期　相ひ見ること復た期せず
64零落甘所丁』　零落して丁(あ)たる所に甘んず』（以上、敍事）

【大意】日暮れになって偃師の西に宿を取ったが、床(とこ)では寢返りを打つばかり。夜になって汴州で亂が起こったと聞き、不安のあまり部屋中を壁づたいに歩き回った。というのも、私は妻子を汴州に殘してきたのだ。（董晉さまのことで）慌てていたので、妻子を率いるゆとりがなかった。再び會える日が來るのかも分からず、落膽して現狀に甘んずるほかなかった。

65嬌女未絕乳　嬌女　未だ乳を絕たず
66念之不能忘　之を念ひて忘るる能はず
67忽如在我所　忽ち我が所に在るが如く
68耳若聞啼聲　耳に啼く聲を聞くが若し
69中塗安得返　中塗にして安んぞ返るを得ん
70一日不可更』　一日も更ふべからず』（以上、抒情）

【大意】娘はまだ乳離れもしていない、それを思うと氣が氣でなかった。その娘がまるでその場にいるような氣がして、泣き聲までもが耳に聞こえるようだった。さりとて中途で引き返すわけにもいかず、旅程は一日たりとも變更はできなかった。

71俄有東來說　俄かに東來の說有り
72我家免罹殃　我が家　殃に罹るを免れ
73乘船下汴水　舟に乘りて汴水を下り
74東去趨彭城　東のかた去りて彭城に趨ると
75從喪朝至洛　喪に從ひて朝に洛に至り
76還走不及停　還り走りて停まるに及ばず
77假道經盟津　道を假りて盟津を經
78出入行澗岡』　出入して澗岡を行く』（以上、敍事）

【大意】突然、東のほうから知らせがあった。我が家は無事、災厄を免れ、妻子は舟に乘って汴水を下り、東の彭城（徐州）に向かったという。葬送に從って洛陽に到ったその朝、私はそこに止まることなく直ちに取って返した。道を選んで盟津を通り過ぎ、谷や岡のあいだを出ては入った。

79日西入軍門　日西して軍門〔河陽の幕府〕に入れば
80羸馬顛且僵　羸馬顛して且つ僵る
81主人願少留　主人〔李元淳〕　少らく留まらんことを願ひ
82延入陳壺觴』　延き入れて壺觴を陳ぬ』（以上、敍事）
83卑賤不敢辭　卑賤　敢へて辭せざるも
84忽忽心如狂　忽忽として心狂へるが如し
85飲食豈知味　飲食　豈に味を知らんや
86絲竹徒轟轟』　絲竹　徒らに轟轟たり』（以上、抒情）

【大意】日が西に傾き、河陽の幕府に入る頃には、私の馬も疲れて倒れ伏していた。河陽節度使の李元淳どのは「暫く泊まっていかんかね」と言い、私を座敷へ請じ入れ、酒の支度をしてくれた。低い身分であるため辭退もできず、さりとて內心氣が狂いそうだった。飲み食いしても味は分からず、宴席での管弦樂も轟轟と耳に響くばかり。

87平明脫身去　平明　身を脫して去り
88決若驚鳧翔　決として驚鳧の翔るが若し
89黃昏次汜水　黃昏　汜水に次り

90欲過無舟航　過ぎんと欲するも舟航無し
91號呼久乃至　號呼すれば久しくして乃ち至り
92夜濟十里黄』　夜　十里の黄(くわう)を濟(わた)る』（以上、敍事）

【大意】明け方私は河陽を脱け出した、まるで何かに驚いた鴨が慌てて飛び立つように。暮れには氾水のほとりに到ったが、渡ろうにも舟がなかった。大聲で叫んでいると舟はだいぶ經ってやってきて、その夜は十里もの川幅のある黄河を渡った。

93中流上灘潭　中流　灘潭に上り
94沙水不可詳　沙水　詳らかにすべからず
95驚波暗合沓　驚波　暗くして合沓たり
96星宿爭翻芒　星宿　爭ひて芒を翻へす
97轅馬蹢躅鳴　轅馬　蹢躅して鳴き
98左右泣童僕』　左右　童僕を泣かしむ』（以上、敍事）

【大意】河中では淺瀬に座礁した、夜だったので砂と水との見分けがつかなかった。激した波は暗がりに重なり合い、星たちは爭うように瞬いていた。ながえに繋がれた馬は足踏みをしながら嘶き、從者たちも泣き合っていた。

99甲午憩時門　甲午　時門〔新鄭の城門〕に憩い
100臨泉窺鬪龍　泉に臨みて鬪龍を窺ふ
101東南出陳許　東南　陳・許に出づれば
102陂澤平茫茫　陂澤　平らかにして茫茫たり
103道邊草木花　道邊　草木の花
104紅紫相低昂　紅紫　相ひ低昂す
105百里不逢人　百里　人に逢はず
106角角雄雉鳴』　角角(こくこく)として雄雉の鳴くのみ』（以上、敍事）

【大意】甲午の日に新鄭の城門にたどり着くと、私は龍がまだ鬪っていないかと淵をのぞき込んだ。その後は東南の方角に向かって許州や陳州に出たが、一面平らかな沼澤が廣がっていた。道の邊の草や木は、低いところや高いところに紅や紫の花を着けていた。百里のあいだ人っ子一人出會わず、雄雉がただケッケッと鳴いていた。

【出典】○鬪龍　『左傳』昭公十九年に見える鄭州の大水の故事。ここでは單に新鄭に立ち寄ったことを示す。

107行行二月暮　行き行きて二月暮れ
108乃及徐南疆　乃ち徐の南疆に及ぶ
109下馬步堤岸　馬を下りて堤岸を步み
110上船拜吾兄』　船に上りて吾が兄を拜す』（以上、敍事）
111誰云經艱難　誰か云はん　艱難を經て
112百口無夭殤』　百口　夭殤無しとは』（以上、抒情）

【大意】そうこうするうち二月も末になり、ようやく徐州の南

端に到着した。馬からおりて汴水の岸辺を歩き、船に上がって従兄に挨拶をした。誰も豫測はしなかった、こんな艱難辛苦を經ても、一族に一人の死者も出なかったとは。

113僕射南陽公　僕射　南陽公〔張建封〕
114宅我睢水陽　我を睢水の陽に宅せしむ
115篋中有餘衣　篋中に餘衣有り
116盎中有餘糧　盎中に餘糧有り
117閉門讀書史　門を閉ざして書史を讀めば
118清風窗戸涼』　清風　窗戸に涼し』（以上、敍事）

【大意】張建封どのは我々一家を睢水の北に住まわせた。長持には十分な衣類が入れてあり、甕には十分な食糧があった。門を閉ざして讀書に耽っていると、涼しい風（秋風）が窓から吹き込んできた。

119日念子來游　日に念ふ　子〔張籍〕の來り游ぶを
120子豈知我情　子　豈に我が情を知らんや
121別離未爲久　別離　未だ久しと爲さざるも
122辛苦多所經』　辛苦　經る所多し』（以上、抒情）
123對食每不飽　對食して每に飽かず
124共言無倦聽　共に言ひて聽くに倦む無し
125連延三十日　連延たり　三十日
126晨坐達五更』　晨に坐して五更に達す』（以上、敍事）

【大意】ここ徐州では君〔張籍〕の來訪を思わない日はなかった、そんな氣持ちを君は分かってくれるだろうか。汴州で別れてさほど經たないあいだに、多くの苦難を經たことだ。君とこうして面と向かって食事をしても飽くことはなく、お互いこうして話していても言葉に聞き厭きることはない。この三十日ものあいだずっと、君とは朝から對座して歡談は未明にまで達した。

127我友二三子　我が友　二三子
128宦游在西京　宦游して西京に在り
129東野窺禹穴　東野は禹穴を窺ひ
130李翺觀濤江　李翺は濤江を觀る
131蕭條千萬里　蕭條たり　千萬里
132會合安可逢　會合　安んぞ逢ふべき
133淮之水舒舒　淮の水は舒舒たり
134楚山直叢叢』　楚山は直くして叢叢たり』（以上、抒情）

【大意】私の友人たちはみな役所勤めで長安にいる。また孟郊君は會稽にいて、李翺君は杭州にいる。みな千里萬里の彼方にいて、なかなか會えないのが寂しい。（私たちを隔てる南方の）淮水はゆっくりと流れ、楚の地方にはとんがった山々が群がっている。

135子又捨我去　子も又た我を捨てて去る
136我懷焉所窮　我が懷ひ　焉んぞ窮まる所あらんや
137男兒不再壯　男兒　再びは壯ならず
138百歲如風狂　百歲　風の狂へるが如し
139高爵尚可求　高爵　尚ほ求むべし
140無爲守一鄉』　一鄉を守るを爲すこと無かれ』

（以上、抒情）

【大意】そして君もまた私を捨てて出て行こうとする。私の悲しみはきわまりない。（君には言っておきたいことがある。）男兒に壯年は二度と訪れず、人の一生など風が吹き荒れるように短いもの。君ならば（中央政界で）高い爵位を得られようから、ゆめゆめ一地方官に甘んずることなどないように。

『唐宋詩醇』巻二十七は、韓愈のこの詩を評して「己の崎嶇險難を歷敍し、意境紆折せるも、時地分明なり（歷敍己之崎嶇險難、意境紆折、時地分明）」、「若し後人之を爲さば、之を冗散〔冗漫〕に失せざる者鮮し（若後人爲之、鮮不失之冗散者）」、「筆力は一髮もて千鈞を引くが如し（筆力如一髮引千鈞）」と絶賛している。確かに、長篇の五言詩全篇にわたって賦體（敍事・抒情・說理）を貫こうとすれば、よほどの技倆がないかぎり、どこかで弛みや破綻を引き起こしかねない。古人が長篇を作る場合、隨所に比興や典故を插入したのは、そうした弛みや破綻を回避する手立てでもあったと考えられる。

張建封が韓愈一家に用意した居宅は、徐州符離縣を流れる睢水の北岸にあった。そして第118句からも知られるとおり、韓愈と張籍との徐州での再會は、おそらく貞元十五年〔七九九〕の秋以降のことであった。しかし徐州は結局、韓愈にとって安住の地たりえず、汴州における「同志の集い」を徐州で再現すべくもなかった。韓愈が翌貞元十六年〔八〇〇〕の春、孟郊に宛てた書簡「與孟東野書」には、李翺や張籍の當時の動靜が綴られている。

李習之〔李翺〕は吾が亡兄の女を娶る。期は後月に在り。朝夕に當に此に來るべし。張籍は和州に在りて喪に居り、家甚だ貧し。恐らくは足下〔孟郊〕知らざらん。故に具に此に白す。冀はくは足下一たび來って相ひ視んことを〔一度和州に行って張籍を見舞ってやっては下さらぬか〕（李習之娶吾亡兄之女。期在後月。朝夕當來此。張籍在和州居喪、家甚貧。恐足下不知、故具此白。冀足下一來相視也）。

張籍が前年秋に韓愈を徐州に訪ねたのは、長安から和州に歸る途次であった。張籍は徐州にほぼ一ヶ月滯在し、その後恐らく老親を見舞うために和州へと歸省したものであろう。進士科

及第者として故郷に錦を飾った張籍は、老親の逝去に果たして間に合ったのかどうか。またこうした張籍の身の上を知ったればこそ、韓愈は前掲詩の末尾で「一鄉を守るを爲すこと無かれ」とあえて勵ましたものと想像される。韓愈らに代表される下級士族の嚴しい家計事情が、この背後にはあったのである。韓愈はこの年の五月に徐州の幕職を去り、家族ともども洛陽へと移住したが、張建封はその數日後に他界し、重石を失った徐州で今度は動亂が起こった。

五、張籍の寄贈詩（貞元期の作）との比較

韓愈は汴州や徐州において、孟郊・李翺・張籍らを同志として遇しながら、贈答詩の制作を通じて、その交遊の模様を克明に綴るという樣式を確立した。そしてその確立にあたって用いたのは、もっぱら賦體（直敍）で構成された五言の古體詩という形式であった。これは、漢魏の五言詩によく見られる比興（寓喩）を織り交ぜた傳統的な形式を踏まえながら、次第にその比興部分の比重を下げ、賦體部分の比重を上げることで、敍事性・抒情性・說理性の純度を高めたものである。こうした韓愈の創作態度は、『唐宋詩醇』においては、六義のうちの雅や頌を繼ぐものと位置づけられている。

……二雅三頌に至りては、終始を鋪陳し、情を竭くし致を盡くす。義は揚厲〔發揚〕に存して、而も其の夸〔誇張〕を病まず、情は呼號に迫って、其の激〔激越〕を嫌はず。其の體たる、迥かに風〔國風〕に異なり、特に詞に煩簡有るのみに非ず、其の意の隱顯固より殊なり。千古以來、寧ぞ含蓄少なきを以て雅・頌の病と爲す者有らんや（至于二雅三頌、鋪陳終始、竭情盡致。義存乎揚厲、而不病其夸、情迫于呼號、不嫌其激。其爲體迥異于風、非特詞有煩簡、其意之隱顯固殊焉。千古以來、寧有以少含蓄爲雅頌之病者乎）。

然らば則ち唐詩王孟の一派の如き、源は風に出づ。而して〔韓〕愈は則ち之を雅・頌に本づき、以て大いに厥の辭を暢ぶる者なり（然則唐詩如王孟一派、源出於風。而愈則本之雅頌、以大暢厥辭者也）。……（『唐宋詩醇』卷二十七）

一體に、國風には比興が多く、雅・頌には賦體が多いという認識は、歷代の多くの學者の間で共有されてきた。[13] 一例を擧げれば、淸の吳喬（一六一一～一六九五）の『圍爐詩話』卷一に「雅・頌に賦多く、是れ實做なり。風・騷〔國風と離騷〕に比興多く、是れ虛做なり。唐詩多く風・騷を宗とす、所以に靈妙なり（雅頌多賦、是實做。風騷多比興、是虛做。唐詩多宗風騷、所以靈妙）」[14] などとあるとおりである。そして唐代の五言古詩のうち、それが國風的な含蓄を受け繼いだものであるのか、それとも雅頌的な直截を受け繼いだものであるのかは、詩の冒頭

に比興部分があるか否かをまず確認することで、おおよその見分けがつく。例えば、孟郊が張籍に贈った五古「寄張籍」詩（『孟東野詩集』巻七）の冒頭は、

夜鏡不照物　夜鏡　物を照らさず
朝光何時昇』　朝光　何れの時にか昇らん』（以上、比興）
黯然秋思來　黯然として秋思來り
走入志士膺』　走りて志士の膺（むね）に入る』
（以上、賦體＝抒情）
……

となっていて、初二句の比興部分が後續の賦體部分を導く構造になっている。この詩は張籍が進士科に及第する以前に孟郊が寄せたものであり、[15] それならば本稿の冒頭に掲げた張籍の五古「贈孟郊」詩とほぼ同時期の作ということになる。興味深いことに、その張籍詩の冒頭にも比興が用いられており、

歴歴天上星　歴歴たり天上の星
沈沈水中萍　沈沈たり水中の萍
幸當清秋夜　幸いに清秋の夜に當たり
流影及微形』　流影〔星影〕は微形〔浮萍〕に及ぶ』
（以上、比興）

君生衰俗間　君は衰俗の間に生まるるも
立身如禮經　身を立つること禮經の如し
淳意發高文　淳意　高文に發し
獨有金石聲』　獨り金石の聲有り』（以上、賦體＝敍事）
……

張籍は孟郊の詩風に倣って、このような詩を贈ったものと想像される。一方で張籍は、韓愈が住まわせてくれた汴州城西の館舍を出て、新たに郊外に住居を賃貸した際、五古「寄韓愈」詩を詠んでいるが、こちらは冒頭からいきなり賦體で始まっている。すなわち、

野館非我室　野館　我が室に非ず
新居未能安　新居　未だ安んずること能はず
讀書避塵雜　書を讀みて塵雜を避け
方覺此地閑　方に此の地の閑なるを覺ゆ
過郭多園墟　郭を過ぐれば園墟多く
桑果相接連　桑果　相ひ接連す
獨游竟寂寞　獨游　竟に寂寞たり
如寄空雲山』　空しき雲山に寄るが如し』
（以上、賦體＝敍事・抒情）
……

とあるとおり、新居のある郊外の鄙びた様子と、寂寥に堪えない自身の境遇とを、直敍の筆致で訴えている。二十二句からなるこの詩は全篇賦體で貫かれており、末尾は、

……
憶昔西潭時　憶ふ昔　西潭〔城西の河邊〕にありし時
竝持釣魚竿　竝び持つ　釣魚の竿
共忻得魴鯉　共に魴鯉を得しを忻(よろこ)び
烹膾于我前　膾を我が前にて烹(に)られき
幾朝還復來　幾朝にか還り復た來たらん
嘆息時獨言』　嘆息して時に獨言す』
（以上、賦體＝敍事・抒情）

と締めくくられている。韓愈とかつて城西の河邊で釣りをしたとき、釣果である魴魚（オシキウオ）や鯉を韓愈が目の前で調理してくれた思い出に浸りながら、鄙びた郊外の新居における孤獨な心境を切々と綴っている。後年、樂府をもって鳴り、また閑居詩という新たなジャンルを開拓した張籍であるが[16]、この頃の詩は韓愈の五古に倣った跡が著しい。ちなみに寶曆元年〔八二五〕に張籍が作った一六六句からなる大長篇の五古「祭退之」詩も、終始韓愈ばりの直敍の筆致で書かれている。

おわりに

以上見てきたとおり、韓愈の貞元後期における五言の贈答詩には、賦體性の增强と長篇化という顯著な特徵が指摘できる。しかしこれらの特徵は、貞元前期にはまだ顯在化せず、拗體五律「落葉一首送陳羽」詩に見られたように、韓愈は比興的な詠い出しを持つ傳統的な送別詩の祖述から出發している。しかしその後、孟郊との交遊が深まるにつれ、五古「北極一首贈李觀」詩や五古「重雲一首李觀疾贈之」詩など、比興と賦體が交互に入れ替わる漢魏風のスタイルを採り入れるようになる。しかし五古「長安交遊者一首贈孟郊」詩や五古「答孟郊」詩においては、次第に賦體性の一層の純化という方向性を示すようになった。そしてついに、本稿で取り上げた五古「病中贈張十八」詩のように、賦體を史書からの典故で補强する形や、さらに五古「此日足可惜一首贈張籍」詩のように、全篇賦體で貫徹する形が出現し、ここに韓愈の早期贈答詩の一つの樣式が確立したのである。

賦體を主とした五言贈答詩の傑作としては、古くは曹植の「贈白馬王彪」（『文選』卷二十四「贈答二」）を擧げることができる。しかし同詩は「蟬聯體」という尻取りの技法を使うなど、修辭の效用になお依存する點を若干殘していた。今回讀んできた韓愈の長篇五古は、そうした修辭技法をほとんど排除したと

ころに成立しており、贈答詩・交遊詩の歴史に一つの劃期をなすものといえよう。

このあと韓愈は、贈答詩の七言化（例：七古「贈張徐州莫辭酒」詩や七古「贈侯喜」詩など）、および寓言詩・詠物詩との合體化（例：五古「駑驥贈歐陽詹」詩や五古「詠雪贈張籍」詩など）を試みながら、交遊詩の幅を一層擴げる努力を積み重ねてゆくようになる。とりわけ後者の試みは、筆者の目には、傳統的な比興に替わる新たな寓喩性を獲得するための實驗のようにも映る。今後とも韓愈の交遊詩を中心に、韓愈がいかなる様式を新たに確立してゆくのかについて、引き續き考察を續けてゆくことにしたい。

【注】

（1）本稿に引く張籍の詩文は、徐禮節・餘恕誠『張籍集繫年校注』（北京：中華書局、二〇一一）に據る。

（2）傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（北京：中華書局、二〇〇二）第二冊卷五「張籍」（吳汝煜氏執筆）第五五四～五五五頁參照。

（3）齋藤茂『孟郊研究』（東京：汲古書院、二〇〇八）「孟郊略年譜」第四三七頁下段參照。

（4）本稿に引く韓愈詩は、錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』（上海：上海古籍出版社、二〇〇七）に據る。

（5）韓愈の事跡については、川合康三・綠川英樹・好川聰編『韓愈詩譯注』第一冊（東京：研文出版、二〇一五）卷末の「韓愈年譜」を主に參照した。

（6）『張籍集繫年校注』下冊「張籍譜略」第一〇六四～一〇六五頁參照。

（7）本稿に引く韓愈文は閻琦『韓昌黎文集注釋』（西安：三秦出版社、二〇〇四）に據る。なお、『古文眞寶』後集卷十「書類」に收錄された同名の古文は、實際には「重答張籍書」に相當する。

（8）方世舉著、郝潤華・丁俊麗整理『韓昌黎詩集編年箋注』（北京：中華書局、二〇一二）下冊第六七二頁參照。

（9）出典の詳細は『韓愈詩譯注』第一冊「022病中贈張十八」（二宮美那子氏執筆）の語釋部分を參照されたい。以下同。

（10）清の顧嗣立（一六六五～一七二三）補注『昌黎先生詩集注』（臺北：學生書局、一九六七）には、この詩に清の何焯（一六六一～一七二二）が付した次のような批語がある。

「几に扶りて」（第13句）以下、此の篇、波瀾起伏せるも、（これ）管公明（管輅）と諸葛景春（諸葛原）の往復變化するに從って來たること分明なり。但だ其の辭を師とせざるのみ（扶几以下此篇波瀾起伏、分明從管公明與諸葛景春往復變化來。但不師其辭耳）。

この批語が指しているのは、『三國志』魏書「管輅傳」の裴松之の注に引かれた「管輅別傳」における、管輅と諸葛原及びその「高譚之客」（論客）たちとの討論の場面である。

そこでは聖人の著作や三皇・五帝の天命についての討論の模様が、實際の交戰に喩えられている。

諸人（諸葛原の論客たち）……是に於いて先づ〔管〕輅と共に聖人の著作の原を論じ、又た五帝・三王の命（天命）を受くるの符を敍す。輅、〔諸葛〕景春の微旨を解し、遂に戰地を開張し、示すに固からざるを以てし、藏匿孤虛して以て來攻するを待つ（諸人……於是先與輅論聖人著作之原、又敍五帝・三王受命之符。輅解景春微旨、遂開張戰地、示以不固、藏匿孤虛、以待來攻）。

景春奔北し、軍師摧衄すれば、〔管輅〕自ら言ふ、「吾、卿が旌旗と、城池の已に壞るるを覩たり」と。其の戰いを欲するの士〔論客たち〕、此に於いて鼓角を鳴らし、雲梯を擧げ、弓弩大いに起こり、牙旗雨のごとく集まる（景春奔北、軍師摧衄、自言吾覩卿旌旗、城池已壞也。其欲戰之士、於此鳴鼓角、擧雲梯、弓弩大起、牙旗雨集）。

然る後、〔管輅〕城に登り威を曜かせ、門を開いて敵を受け、上は五帝を論じて、江の如く漢の如く、下は三王を論じて、翮の如く翰の如し。其の英なる者は春華の俱に發くが若く、其の攻むる者は秋風の葉を落とすが若し（然後登城曜威、開門受敵、上論五帝、如江如漢、下論三王、如翮如翰、其英者若春華之俱發、其攻者若秋風之落葉）。

聽く者は眩惑して、其の義に達せず、言ふ者は聲を收めて、心服せざるは無く、白起の趙卒を坑し、項羽の濉水を塞ぐと雖も、以て之に尚ふる無し。時において客、皆面縛して璧を銜み、〔管輅の〕軍鼓の下に束手するを求む（聽者眩惑、不達其義、言者收聲、莫不心服、雖白起之坑趙卒、項羽之塞濉水、無以尚之。于時客皆欲面縛銜璧、求束手於軍鼓之下）。……

何焯の指摘は恐らく的を得ている。それは、韓愈が平素、經書や史書に親しみ、儒學や古文の研鑽に勵んでいたため、史書の一節が作詩の構成に影響することは十分にあり得るからである。

(11) 正式には「故金紫光祿大夫・檢校尚書左僕射・同中書門下平章事兼汴州刺史・充宣武軍節度副大使・知節度事管內支度營田汴宋亳潁等州觀察處置等使・上柱國隴西郡開國公・贈太傅・董公行狀」と題する。

(12) この行程は『韓愈詩譯注』卷末の關係地圖第五〇五頁に詳しい。

(13) 葛曉音『先秦漢魏六朝詩歌體式研究』（北京：北京大學出版社、二〇一二）第一五三～一五四頁參照。

(14) 郭紹虞編選『清詩話續編』（上海：上海古籍出版社、一九八三）上冊第四八一頁に據る。

(15) 齋藤茂『孟郊研究』第九一～九二頁參照。

(16) 松原朗『晩唐詩の搖籃　張籍・姚合・賈島論』（東京：研文出版、二〇一二）Ⅰ（張籍の部）參照。